

プロの対話から学ぶ感染症

著：岩田 健太郎・青柳 有紀・岡 秀昭・本田 仁

国境を問わない感染症の時代に 価値ある一冊

この10年で変化を実感しているものの、日本の臨床現場では臨床感染症専門医（clinical infectious disease specialist）の必要性は、まだわかりにくいのだと思う。米国では250床当たり1人の感染症専門医の配置が院内感染症を減らすという報告^{*1}から、各病院にこの専門医の存在が要求されている。

2005年に3か月ほど米国 Mayo Clinic を視察して、彼らの仕事とは臨床症状（clinical syndrome：CS）から感染症が存在するかどうかを判断し、治療のサポートをするコンサルタントの仕事であると私は理解した。そのためには、臨床症状からどのような感染症が起こっているのかを推定し、身体診察と検査にて感染臓器を特定し、推定される起病菌は何で、治療をどうすべきかのプランを組み立てていく作業を行う。そのなかで決定的な情報を与え得るのが、微生物の情報である。本来は、先に微生物ありきではない。臨床症状からの起病菌の推定、その起病菌が引き起こすであろう、他の臨床症状の有無を確認するという作業は、広範な知識を要し、そのためには専門家の助言が本来は必要ということである。

この本は、まさにこのような作業を具体的に示している。必ずしも検査の

データや検出された菌名から思考をスタートせず、臨床症状を考えていることがわかる。扱っている12の症例は、まれな感染症で、内容は専門家向きであり、海外の事情を知らないとう理解ができないものも含まれている。初期研修医には、補足情報がないと難しい内容に感じるだろう。しかし、グローバルに人が往来する現代、目下問題となっているCOVID-19を考えると理解できるが、感染症は国境を問わない時代となっている。人ごとと思わず、突然目の前に現れる可能性は実際にあると思うべきであろう。本書にも軽く触れられているが、麻疹の発症を想定した準備をしない空港の検疫はおかしいかもしれない、という理解を（現在の検疫が悪いという非難ではなく）、多くの医師が共有することにより診療の質が上がるのだろう。そのためには感染症の基礎知識が不可欠である。

本書の内容にぐいぐいと引き込まれて、私は週末にあっという間に読んでしまった。症例から起病菌を推定する作業は大変楽しかったし、すべてではないが、最初の与えられた情報から著者らと同じ結論を導いたのも数例あった。このことは私自身の診断力の自信にもつながり、一方で日常お目にかか

れない稀な事例は、本当に刺激で学ぶことが多かった。多くの後期研修医に読んでもらいたい本である。マニュアルにはない奥深さを感じとれる内容になっているので、少なくとも感染症の世界を目指している若い医師には、必読書として強く推薦するところである。また、私自身引いてみて勉強になったので、専門家を目指すなら、ここに挙げられている参考文献も目を通していただきたいと思った。姉妹書というべき『感染症の往復書簡』^{*2}も勧めたいところである。

（清田 雅智）

^{*1} Haley RW, et al. The efficacy of infection surveillance and control programs in preventing nosocomial infections in US hospitals. Am J Epidemiol 1985 ; 121 : 182-205.

PMID : 4014115

^{*2} 青柳有紀・本田仁 著、MEDSi, 2015.

当日のクロストークの雰囲気はこちらでもご覧ください！



MEDSi
4,950円（本体4,500＋税10%）
A5/240頁
ISBN 978-4-8157-0188-8